



スバル叢書第七編

歌集
朝
の

足達己巳子著

日本文芸社刊

歌集 朝 の 海

昭和39年9月15日発行

著 者 足 達 己 巳 子

甲府市塩部町県住3の21

発行者 石 黒 清 介

印刷所 日 本 文 芸 印 刷

製本所 博 伸 社

発行所 日 本 文 芸 社

東京都千代田区神田鎌倉町25

振替 東京 56617番

¥ 500円

はしがき

著者、足達己巳さんの「あとがき」を拝見して更めてたしかめ得たのだが、己巳さんに私が初めてお目にかかったのは昭和三十六年一月のことである。もっと古くからの親しいおつきあいのような気がしているのは、前々からの修練でそのころ既に作歌も或る域に達しておられたことや、そのお人柄の好もしさに当初から親近感をいだかしめられていたためであるらしい。

静かで、可憐で、しかし、内には一筋の強い何かが備わっている。——と一口に申せば、現代ではやや古めかしい感じであるかも知れないが、父君は明治中期から昭和二十年にかけて、わが国篆刻界の最高峰と謳われ、多くの秀れた

業績をとどめられた、足達疇邸氏である、と申し添えれば、この著者の人となられた環境や、血につながる芸術的才能のほども推察されて、人は成程と認識を深くされるであろうと思う。

一人暮らしの寂けさ、自在なるがままに、最近は仏教にも親しまれ、佳き隨筆なども折々発表されているが、それもよし、と、同時に敢えていささかの苦言を呈するとすれば、内攻性に偏すること無く、実社会にもひろく潤達な目を開らき、また、若き目をひとたびは思い切って飛翔されてみるのも、のちのため、無駄なことでも無いであろう。この事は己巳さんの作品についても同様に申せることであり、己巳さんの豊かな可能性を識る故でもある。

ともあれこの一本は、著者がまごころをこめて亡きご両親に捧げられる最初の手向けの花束である。せめて母君でもが同じ世に生きておわさばと思うこと

は、私の涙を誘うが、云って詮無いことである。己巳子さん自身の心中にも切なるものがあるであろうが、「あとがき」にも感傷めいた言辞を斥けられておられる配慮は頼もしい。しかし、逆に考えれば、戦中、戦後の苦しい生活の体験や、父君の死、またさらにいくほどもなく最愛の母君の死という、悲痛冷厳な人生の一大事に遭遇されたその事が、己巳子さんに於て真の歌、及び人間的開眼の機縁ともなったのであって、これは己巳子さんに限らず、大方の秀れた人間の無惨な、且つは貴重な宿命にも通うものであろうか。

将来の大成を期待する念をもふくめて、己巳子さんの人及び作品を愛し、信用する人は私以外にも数多いであろうことを信じて疑わない。

集中、佳作は少なくないが、数首を抜いて記し、私の至らぬ一文の補いとする。

ひろがりてレースのごとき水の泡のひとつひとつの消ゆる音する

夕せまる青田美し今日植えし苗かやさしくかたむきいるは

したい来し仔犬のつむり撫でもせで帰せしを心いたみて思う

自然より愛くしまれてあるごとく雨のしぶきを額上げて聞く

ぶどう糖やヴィタミンの匂い混り合い長病めど母は清らに匂う

白布かけし冷たき母をひとり置きうながされてとは言えかたみをえらぶ

この花を造りしは何この花をやがてほろぼすちからにおなじ

昭和三十九年秋立つ日

中 原 綾 子

目次

序

中原綾子

くぬぎの若芽……………

二

緋つつじ……………

一五

みだれ……………

一五

モルダウ……………

一七

夏の雲……………

一九

メーデー……………

一九

高原……………

二〇

夜汽車……………

二三

朝の海	三
雪炎	三
音のみの汽車	三
雨の音	三
草いきれ	四
瞬時	四
幻	五
彼は誰れ星	五
ひがん花	六
夕茜	六
七いろの音	七
愛別離苦	七

地の冷え	二〇
うらじろ	二一
振りかえる犬	二三
笛吹川	二四
放　心	二六
湯　の　川	二〇
小雨の海	二三
ち　か　ら	二六
植　木　市	二六
或る個展にて	二九
花　　　花	二三
俯　　瞰	二四

波紋	……	一三
伽羅の実	……	一四
陽の昇る位置	……	一五
妙有	……	一五〇
木琴	……	一五四
積乱雲	……	一五九
夕映え	……	一六三
千曲川	……	一六六
双眼鏡の中	……	一七〇
旅にて	……	一七五
蜥蜴	……	一八四
あとがき	……	一九二

朝

の

海

くぬぎの若芽

さみどりにくぬぎの若芽萌え立てばここには
雨も光りつつ降る

いたましく花はくずれぬかくまでに面影変る
薔薇かと思う

降りしきりふと遠のける雨音を白き風とも窓
内に聞く

虹ふたつ淡あわと浮く空の下山の色
牙え陽は
かげりゆく

野の草に腹すりつけて犬の仔は夕の散歩をよ
ろこべるらし

裏庭の枝ぶり悪あしき木なれどもざくろの花の朱あけ
は佳きかな

雲裂けて落日の光降りそそぐ宗教の画に見し
ごとき夕

堪うることなど知らざりし幼まなき日 父在まさ
ばと思う感傷の時

むらむらと雲は流るる風の夜の墓地の辺りの
妖氣に遇いぬ

禍^{まが}まがし墓地の大樹の枝剪られ切口白く闇に
浮くなる